

令和 7 年
第 9 回定例会議事録

令和 7 年 9 月 3 0 日

泉大津市教育委員会

令和7年9月30日（火）午前10時より令和7年第9回泉大津市教育委員会
会議定例会を泉大津市役所3階301会議室に招集した。

出席委員

教 育 長	竹内 悟
教育長職務代理者	澤田 久子
教育委員	西尾 剛
教育委員	池島 明子
教育委員	奥 健一郎（オンライン）

出席事務局職員

教育委員会事務局長	鍋谷 芳比古
教育委員会事務局教育政策課長	大塚 和弘
教育委員会事務局指導課長	藤谷 考志
教育委員会事務局生涯学習課長	中山 裕司
健康こども部こども育成課長	寺田 和夫
教育委員会事務局指導課長補佐	山本 圭亮
教育委員会事務局指導課長補佐	表 一成
教育委員会事務局教育政策課	三上 達朗
教育委員会事務局教育政策課	高岡 愛

案件

日程第 1 報告第21号 令和7年度「全国学力・学習状況調査」「小学生すくすくウォッチ」の結果概要について

日程第 2 報告第22号 泉大津市教育委員会の後援名義使用について

議事録署名委員

教育委員 奥 健一郎

※読みやすさ等のため、発言の趣旨を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

会議の顛末

○竹内教育長 令和7年第9回教育委員会会議定例会の開会宣言

○令和7年第8回教育委員会会議定例会議事録承認

△日程第 1 報告第 2 1 号 令和7年度「全国学力・学習状況調査」「小学生すくすくウォッチ」の結果概要について

◎指導課長（藤谷考志）調査目的ですが、全国学力・学習状況調査につきまして、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、「全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証しその改善を図る。」「学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。」「そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。」の3つでございます。小学生すくすくウォッチにつきましては、子どもたち一人ひとりが自らの強みを知り、学びの基盤となる言語能力や読解力、情報活用能力、問題発見・解決能力等を向上させ、これからの社会を生き抜く力を着実につける。」でございます。

調査対象は、全国学力・学習状況調査については、小学校6年生と中学校3年生、小学生すくすくウォッチについては、小学校5年生と6年生となっています。

調査事項につきまして、全国学力・学習状況調査は、小学校6年生は国語、算数、理科と質問調査、中学校3年生は国語、数学、理科と質問調査でありまして、学校対象の質問調査も実施されました。

小学生すくすくウォッチにつきましては、小学校5年生は国語、算数、理科と、教科横断型問題であるわくわく問題、小学校6年生は教科横断型問題であるわくわく問題となっており、わくわく問題につきましては、5・6年生ともに共通の問題となっております。またどちらの学年におきましても、アンケートが実施されております。

調査実施日は、全国学力・学習状況調査は、小学校5年生の国語、算数、理科と中学校3年生の国語、数学が、令和7年4月17日、今回オンラインでの回答になっております中学校3年生の理科が、令和7年4月14日から17日の間に実施されており、同じくオンラインでの回答である質問調査は、教科調査の実施後に回答することとなりました。

小学生すくすくウォッチにつきましては、令和7年4月16日から24日で学校が実施日を決定する形で実施されております。

では、全国学力・学習状況調査と小学生すくすくウォッチの結果概要になりますが、別冊の通りとなっておりますので、ここからは担当から説明させていただきます。

◎指導課長補佐（山本圭亮）まず、全国学力・学習状況調査結果についてご説明させていただきます。冊子の4ページをご覧ください。

小学校国語について、本市の平均正答数は14問中8.8問、平均正答率は63%で、全国及び大阪府の平均正答率をやや下回っております。一方で、無解答率は全国・大阪府よりも低く、粘り強く問題に取り組めていることがわかります。この傾向は数年前から続いております。右側の正答数分布グラフからは、正答数の多い児童の割合が全国・大阪府よりも低い傾向にあることが読み取れます。

次に、5ページ、6ページをご覧ください。結果の主なポイントです。

良好な点としましては、図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表

し方を工夫すること、また、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること等は、比較的にできておりました。

一方、課題のある点としましては、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと、また、事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること等に引き続き課題が見られました。

では、具体的な問題例をいくつか紹介させていただきます。7ページをご覧ください。

大問1の二、右上に示された【話し合いの記録】の書き表し方を説明したものとして最も適切なものを4つの選択肢の中から一つ選ぶという問題でございます。選択肢2の「質問する内容を四角で囲み、線でつなぐことでインタビューの流れを整理している」が正答ですが、本市の正答率は58.3%でした。解答類型別に見てみますと、選択肢3の「質問する内容を短い言葉で書き、線でつなぐことで質問を一つにしぼっている。」の反応率が22.7%と高いことが分かります。

このことから、【話し合いの記録】から短い言葉で記録していることや、線で内容をつないでいることなどの表し方を理解することはできていたが、語句と語句との関係を理解することができなかった児童がいたと考えられます。授業等においては、目的や意図に沿って、線や囲みなど図示することによって自分なりに情報を整理できるようにすることが重要であるとともに、情報の整理の仕方については、年間を通じて複数回、意図的に指導することも大切だと考えております。

次に、8ページをご覧ください。

大問2の一、右上に示された【ちらし】について、文章の構成をどのように工夫しているかを説明しているものを選ぶ問題でございます。選択肢2の「伝えたいことの中心を明確にして、内容のまとまりごとに分けて書いている」が正答ですが、本市の正答率は64.0%でした。

このことから、書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることに課題があると考えられます。

解答類型別に見てみますと、選択肢1と選択肢4の反応率が合わせて28.7%です。

このことから、順序に着目してしまい、伝えたいことの中心を明確にして、内容のまとまりごとに分けて書いていると捉えることができなかった児童がいたと考えられます。授業等においては、文章を書く際にまずはそれぞれの児童が「何のためにその文章を書きたいのか」という目的を明確にもつことが大切であり、その上で、その目的を達成するには、「何を書きたいのか」を整理し、書く内容の中心を決めることが重要だと考えます。

続いて、9ページをご覧ください。

小学校算数について、本市の平均正答数は16問中8.7問、平均正答率は54%で、全国及び大阪府の平均正答率をやや下回っております。右側の正答数分布グラフからは、国語同様、正答数の多い児童の割合が全国・大阪府よりも低い傾向にあることが読み取れます。主なポイントとしましては、異分母の分数の加法の計算をすることはできておりましたが、数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることには課題が見られました。

また、伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことはできておりましたが、「10%増量」の意味を解釈し、「増加後の量」が「増加

前の量」の何倍になっているかを表すことには課題が見られました。

では、具体的な問題例をいくつか紹介させていただきます。

10ページをご覧ください。

大問2の(2)、台形を選ぶ問題です。本市の正答率は、42.8%でした。解答類型に着目すると、選択肢1や3のような四角形を台形と捉えることはできているが、選択肢5のような上下に向かい合った一組の辺が平行で上の辺の長さが下の辺の長さよりも長く、直角のある四角形を台形と捉えることができていない児童がいたと考えられます。授業等においては、図形の置き方をいろいろと変えても、図形を構成する要素及びそれらの位置関係に着目して、図形を弁別できるようにすることが重要だと考えます。

次に、12ページをご覧ください。

大問3の(3)、数直線上の目盛りが表す数を分数で書く問題でございます。本市の正答率は、33.7%でした。数直線上で1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることに課題が見られました。授業等においては、数直線上の目盛りが表す数を分数で表すことで、分数の意味や表し方について理解を深めることができるようにすることが重要だと考えております。

次に、13ページをご覧ください。

大問4の(2)、ハンドソープの液体と容器を合わせた重さが示されており、使いかけのハンドソープが空になるまであと何プッシュすることができるのか知るために、必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題でございます。本市の正答率は43.8%でした。授業等においては、複数の情報から場面に基づいて必要な数量を見だし、それらの数量の関係を捉えるとともに、その関係を式や言葉の式に表現できるようにすることが重要だと考えております。

続いて、14ページをご覧ください。

小学校理科について、本市の平均正答数は17問中8.7問、平均正答率は51%で、全国及び大阪府の平均正答率を下回っております。一方で、無解答率は全国・大阪府よりも低く、粘り強く問題に取り組んでいることがわかります。右側の正答数分布グラフからは、やや左よりの山になっていることが見て取れます。

次に、15ページ、16ページをご覧ください。

良好な点としましては、土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することが概ねできておりました。また、電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識は身に付いていることがわかりました。

一方、課題のある点としましては、電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することや、発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することに課題が見られました。

では、具体的な問題例をいくつか紹介させていただきます。

17ページをご覧ください。

大問2の(2)、「人形Aの剣を人形Bに当てたときだけ、かねが鳴る」のはどの回路かを選ぶ問題でございます。本市の平均正答率は37.7%でした。この問題を解決するためには、問題の図、選択肢の図の意味をしっかりと理解することが大切です。回路中にある「電気を通さない持ち手」を見いだすことができるかがポイントです。

18ページをご覧ください。

こちらの正答数別類型割合グラフは、全国の結果ですが、「正答数の少ない児

童」では、約4割が「類型3」を選んでおり、「平均的な正答数の児童」においても、正答の割合は4割弱でございました。授業等においては、図の意味を理解し、回路がつながっているかどうかを確認するなど、実験の計画を振り返ったり、修正したりする活動を設けることが大切であると考えております。

19ページをご覧ください。

大問2の(4)、乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いているかどうかをみる問題で、直列つなぎを正しく選択できた児童の割合が、約5割に留まっております。

また、20ページの大問3(1)の、ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかどうかをみる問題では、本市の平均正答率は56.4%でした。【解答類型5】のおしべ、めしべは正しく捉えているが、「花粉がめしべの先につくこと」を「受粉」と捉えていない児童の割合が25%(約4分の1)でございました。やはり、知識を他の学習や生活の場面でも活用できる程度に理解することが重要です。

そのため、観察や実験したことについて、図に整理したり、関連する用語をまとめたりしながら、知識が身に付くように意識して授業を改善することが大切だと考えております。

以上が、全国学力・学習状況調査における小学校の結果概要でございました。
◎指導課長補佐(表一成) それでは、中学校の説明に移ります。冊子22ページをご覧ください。

中学校国語について、本市の平均正答数は14問中7.1問、平均正答率は51%で、全国及び大阪府の平均正答率をやや下回っております。

一方で、例年課題であった無解答率につきましては、全国まであと1歩となっております。改善傾向にございます。

右側のグラフをご覧ください。こちらも例年課題でしたが、正答数が2問から4問程度の生徒の割合が減少し、全国や府の割合に近づいております。

次に24ページをご覧ください。

結果が良好であった点としましては、大問1の二、目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることや、大問2の二、相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫すること等は、比較的でできておりました。

一方、大問1の四、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことや、大問2の四、資料や機器を用いて自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫することに引き続き課題が見られました。では、具体的な問題例を2つ紹介いたします。

25ページをご覧ください。

美術展のチラシを作成する中で、去年の参加者の感想をもとに行った工夫について書く問題です。ちなみにですが、近年国語の問題でも、横書きの資料からの出題が増加しております。これには国から教員への、「資料の読み取りも、読書の一環である」というメッセージが込められています。

また、過年度で課題であった問題について、国として再調査する意味で出題された問題でもあります。

26ページをご覧ください。

正答率は26.1%で、根拠を明確にして書くことについて引き続き課題がございます。

27ページ下段の例をご覧ください。

「昨年はお土産のペン立てを私も作ってみたいと言う感想を貰いました。しか

し、今年は、自分でペン立てを作る体験コーナーがあります。」のように、話し言葉としてであれば言いたいことを理解できないものについても、書き言葉としては適切に表現できていないものもございます。授業においてこのような事例を流してしまうことなく、適切に指導していくことが求められています。

28ページをご覧ください。

スピーチの内容をよりわかりやすく伝えるための、発表スライドの工夫について助言する問題です。

29ページと30ページを続けてご覧ください。

正答率は22.4%で、全国とそこまで差はないものの、23.1%の生徒が、自分が考えた工夫について、スピーチのどの部分をわかりやすくするのかについて書くことができていません。

31ページのグラフをご覧ください。

正答数が比較的多い層でも、2割以上の生徒が相手のリクエストに応えられていません。こういった実態を踏まえて授業を進める必要がございます。

続いて32ページをご覧ください。

中学校数学について、本市の平均正答数は15問中6.5問、平均正答率は44%で、こちらも全国及び大阪府の平均正答率をやや下回っておりました。

右側のグラフをからは、正答数の多い少ないに関わらず、全体的な底上げが必要であることが読み取れます。

33ページをご覧ください。

結果が良好であった点としましては、大問8の(1)、事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることや、大問7の(1)、必ず起こる事柄の確率について理解することについては概ねできていました。

一方で、大問1、素数や、大問4、増加量や変化の割合などの、基本的な用語の理解については、引き続き課題が見られました。35ページに示していますように、例えば単に素数の定義を記憶しているだけでは、1が例外であることを忘れてしまうかもしれません。しかし、どうして1が素数に含まれないのかの意味を理解していると、そのような事は起こりません。知識の分野を単なる記憶分野とすることなく、意味理解を促すような授業を行っていくことが大切です。

36ページ、増加量についても同様です。

「関数の式を見たら、問題文の数値を代入する」といった機械的なことをしてしまう生徒が、4人に1人以上います。概ね計算できれば良しといった算術的な考え方ではなく、37ページにありますように、ときには、日常や社会の事象に関連付けて、数学用語の本質に迫る必要があります。

38ページをご覧ください。

今年度の中学校の理科におきましては、紙ではなく、1人1台端末でテストを受ける、いわゆるC B T形式が導入されました。全国に共通する問題は、大問1のみで、市内の三中学校においても、小津中学校では2と9、東陽中学校では3と6、誠風中学校では4と7といった具合に、実施日によって異なる問題を解いています。

また、残りの16問については、非公開問題とされており、生徒毎に異なる問題を解いています。

39ページをご覧ください。

この非公開問題には、項目反応理論、通称I R Tが導入されており、異なる問題から構成される試験の結果でも、同じ尺度で比較することができるようになっております。例えばと視力検査のように、正解すれば、次の難易度が上がり、

不正解であれば、次の難易度が下がるような出題がなされます。そのメリットにつきましては、掲載されている３点に加え、調査問題として非公開問題を経年で使用することにより、学習指導要領の定着を国レベルで正確に把握できることとされております。

なお、令和８年度では、中学英語が、令和９年度からは、小中学校の全教科で、ＩＲＴを用いたＣＢＴ形式での調査が行われます。

４０ページをご覧ください。

それぞれの学校で実施した問題が異なりますので、各校の平均点等は算出されませんが、代わりにＩＲＴスコアと言う、５００を基準にした推定値が算出されます。

また、ＩＲＴバンドと言う５段階の区切りを用いて、分布のグラフも表示されています。

４１ページをご覧ください。

本市の平均正答数は大問１の６問中２．４問、平均ＩＲＴスコアは４６５で、３教科の中で最も課題が大きくなっております。

また、右側のグラフからは、ＩＲＴスコアの分布が全国や府に比べてやや左側に来ており、全体的にスコアが低いことがわかります。本市では共通問題である大問１に注目して分析を行いました。

４２ページをご覧ください。

大問１においては、たった６問の中に、水をテーマにした探求の過程および、物理・地学・生物・化学を全て含む、非常に練られた問題が出題されました。

４３ページをご覧ください。

振り返りの記述については、多くの生徒がしっかりと書くことができていました。

一方で、比較的簡単な知識・技能には引き続き課題があり、身の回りの事象から生じた疑問や見出した問題を解決するための課題を設定することには、課題があることがわかりました。

４４ページをご覧ください。

Aさんが持った疑問に対して、先生がどのような課題にすれば良いですかと尋ねています。授業におけるめあてにつきましても、こちらから提示する時代では無くなってきているのかもしれません。

４５ページをご覧ください。

７割を超える生徒が、生徒例のようにしっかりと振り返りを記述することができました。各教科における振り返り、活動の賜物であると捉えております。

最後に４６ページをご覧ください。

調査問題から国のメッセージを受け取り、今後の授業に生かすことや、分析を通して見えてきた子どもたちの実態に応じて手立てを講じていくこと、これらのプロセスを通じて教員に身に付く分析力を今後も発揮していくことなどについて、現場の先生方とも深めていきたいです。

中学校につきましては以上です。

続きまして、質問紙と各教科の正当数との相関係数についてご説明いたします。別冊の追加資料をご覧ください。

まず小学校についてですが、相関係数についてご説明いたします。

相関係数とは２種類の値の関連の強さを表しています。

例えば数値がプラス１に近いと言うことは、一方の数値が大きいほど、もう一方の数値も大きくなり、一方の数値が小さいほど、もう一方の数値も小さくなることを意味しています。反対に数値がマイナス１に近いと言うことは、一方の数

値が大きいほど、もう一方の数値は小さくなるということを意味しています。数値が0に近ければ、互いの値の大小は無関係であることを意味します。

今年度の国立教育政策研究所からの報告会では、相関係数が0.2を超えたものについて、質問項目と正当数に深い関係があったと判断されておりました。本市でもこれに準じて、関係が深かったものを青色で表示しております。

ただし、この関係の深さは、因果関係までは意味しないことに留意が必要です。その他の気になる部分については、他の色で表示しておりますので、順にご説明いたします。

小学校と中学校では、相関係数が0.2を超えた質問項目がほとんど一致しておりました。

小学校におきましては、例えば質問番号24「読書は好きですか」という質問に肯定的な回答をした児童ほど、正答率が高い傾向にございます。あるいは正当数の多い児童ほど、読書が好きであると読み取ることもできるわけですが、読書がもたらす語彙や表現の形成を鑑みますと、小学校における読書活動は、大変重要であると捉えることができると思われます。

さて、質問番号26「地域の大人に授業や放課後などで勉強やスポーツ体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがありますか（習い事は除く）」について、マイナスの相関が強く働いており、オレンジ色で表示しています。

こちらにつきましては、習い事を除くということで、非常に厳しい現実ですが、家庭の経済的背景を示しているものと思われます。

実は質問番号22「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか」につきましても、家庭の経済的背景を示している質問項目として捉えられております。

次に質問番号28から30-6番までからは、本市におけるICTの教育効果が見て取れます。

また、質問番号31から40番までからは、授業における主体的・対話的な活動の教育効果が見て取れます。

一方で、黄色で示しておりますように、各教科の勉強は好きですかという質問では、数値にばらつきがございます。

国語や理科では、その教科が好きでも数値が0.2を超えていません。

これにつきましては、例えば国語であれば、文学作品や小説が好きで、登場人物について想像を膨らますことが好きと言う児童も一定数いるかと思いますが、先ほど問題をご紹介したように、今求められている国語の力は、以前と比べて随分変わってきており、国語が好きであっても、根拠を明確にして自分の意見が書けない場合があることなどを表しているものと考えられます。

ピンク色で示しております、教科の内容はよくわかりますか？という質問では、数値が概ね0.2を上回っております。一方、緑色で示しておりますように、学習した事は、将来社会に出たときに役に立つと思いませんか？の質問では、すべての項目で数値が0.2を下回っております。我々教員が、何のために授業をしているのかについて、改めて問い直していく必要があると強く感じます。

さて、質問番号51「国語の授業で目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけていますか」につきましては、本市で取り組んでいるリーディングスキルとも深い関係がございます。

実は、大阪府教育庁からのヒアリングの際に、リーディングスキルにかかる取り組みを始めとした学力向上の取り組みについて、お褒めの言葉をいただきました。その際、府の指導主事の方から、質問51なんかに成果が現れているといい

ですねとおっしゃっていただきました。

特に国語において強い成果が現れており、喜ばしく感じております。

その他、何も色の付いていない項目につきましては、願わくばもっと数値として現れて欲しい質問項目であると捉えております。授業において、意識するポイントにつながるとも考えております。

次に中学校の説明に移ります。

中学校につきましても、ほとんどの項目で、小学校と同様の傾向にございました。一方で、質問番号33「1、2年生の時に受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」については、小学校より数値が低く、振り返り活動の一部が、自身の力を伸ばすためではなく、評価のための活動となっている可能性もございます。

また、質問番号62「理科の授業の内容はよくわかりますか」について、理科の数値が0.2を下回っており、学習評価が甘くなっていないかを見直していく必要もあると考えております。

すべてはご紹介できませんでしたが、気になった点がございましたら、お気軽にお尋ねいただければと思います。

◎指導課長補佐（山本圭亮）次に、小学生すくすくウォッチについてご説明させていただきます。冊子の50ページをご覧ください。

5年生の国語についてです。出題された問題には、リーディングスキルを問う問題が多数含まれております。本市の平均正答数は17問中11.6問、平均正答率は68.3%でした。大阪府の結果とほぼ同水準でございます。

良好な点として、文を正しく理解し、指示語の指示内容を捉えることや、一文を二文に分けて書くとき、文と文の意味のつながりを考え、適切な接続語を使うこと等は比較的できていました。

一方、課題のある点としては、文の中における主語と述語の関係に注意して、述語の部分の正しく書くことや、示された文の構造や、情報と情報の関係を理解して文の内容を正しく捉えることには課題が見られました。

また、本市の学力向上プランとの関係の強い問題がございますので、具体的な問題例をいくつか紹介させていただきます。51ページから53ページをご覧ください。

大問2の（1）（2）文中の助詞を正しく使えるかどうかをみる問題や、大問7の（2）・大問12の（1）リーディングスキルのいわゆる「照応解決」「係り受け解析」にあたる問題は、概ねできておりました。

一方、大問8の（1）示された文の構造や、情報と情報の関係を理解して分の内容を正しく捉える問題、またリーディングスキルのいわゆる「同義文判定」にあたる問題では、平均正答率が56.1%と課題が見られました。

次に、54ページをご覧ください。

5年生算数についてです。出題された問題には、大阪府の小学生が特に苦手としている領域を中心に出题されております。本市の平均正答数は7問中4.0問、平均正答率は66.0%でした。大阪府をやや下回っております。一方で、無解答率は大阪府よりも低く、粘り強く問題に取り組めていることがわかります。

良好な点として、円の直径についての理解を通して、1枚の画用紙に円を何個かくことができるかを考えることは概ねできていました。

一方、資料から読み取った内容と棒グラフが示している内容を関連づけ、内容を正しく理解することには課題が見られました。

次に、57ページをご覧ください。

5年生理科についてです。出題された問題には、大阪府の小学生が特に苦手としている領域を中心に出题されております。本市の平均正答数は11問中6.7問、平均正答率は60.8%でした。大阪府をやや下回っております。一方で、無解答率は大阪府よりも低い結果でした。

良好な点として、暖かい空気は上方へ流れるという性質を理解し、火事で避難するときに取るべき姿勢を考えること等は概ねできておりました。

一方、気温を測るときの温度計の正しい使い方について理解すること等には課題が見られました。

次に、61ページから70ページをご覧ください。

小学生すくすくウォッチでは、教科の問題に加えて、教科横断型の問題いわゆるわくわく問題が出题されます。このわくわく問題は、5年生6年生で共通の問題が出题されました。

71ページをご覧ください。

大問1は、身近な飲み物であるミックスジュースを切り口に、資源を無駄にしないことなど、環境をテーマとした題材とし、読み取った情報に基づいて抽象化して考える力や、目的に合う自分の考えを理由とともに伝える力を問う内容です。普段の生活の中に環境に配慮した取組みがあることを理解し、自分のひとつひとつの行動や選択にも環境に与える影響があることを考える機会としてほしいというメッセージが込められております。

次に、72ページ、大問2では地域で行われる防災訓練を題材とし、論理的に思考し問題を発見・解決していく力を問う内容です。

普段の生活の中で非常食を備えることや、防災訓練に参加することの大切さに気づき、関心を持ってもらえるような場面設定がされています。特に(1)では、身近にある食品が非常食として備えることができる食品になるかどうか、表を使って分類することを通して、災害が起きる前にできることは何かを考える機会としてほしいというメッセージが込められております。

73ページにありますように、大問1(2)や大問2(1)の結果より、資料をもとに、どのような考えによって整理、分類されたかを読み取ることに課題が見られました。授業等においては、低学年から各教科等で系統立てて体験的に行うことが重要であるとともに、同じところや違うところに着目することや、目的をもって仲間分けをする活動を取り入れることが大切です。

また、資料の内容を読み取り、目的に応じて表に整理することや、表から資料を捉えなおす活動も重要だと考えております。

74ページをご覧ください。

大問3では、近年、さまざまな社会的場面で活用されている「ナッジ」を題材として、資料や会話の内容を適切に読み取る力、アイデアを言葉や絵にして具体的に伝える力などを問う内容です。

身近なものから、工夫が凝らされたものまで、さまざまな例を紹介することで、楽しさと驚きをもってナッジの概念を理解できるような構成とされています。ナッジの有効性を理解し、身の回りで適用する方法を考えることを通して、課題の解決には、さまざまなアプローチの仕方があるということを学んでほしいというメッセージが込められております。

結果より、自身で考えたことを理由や根拠を明確にして伝えることに課題が見られました。授業等においては、図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、それをもとに新たな課題を考えたり、自分の考えをまとめ、伝えたりする活動も重要だと考えております。

次に76ページをご覧ください。

児童アンケートの結果についてです。泉大津市の子どもたちの全体の傾向として、【未来に向かう力】のうち、「人と関わる力」がほかの力に比べて高いという結果でした。

一方で、「目標に向かって頑張る力」のうちの「ぶれない心」や「気持ちをコントロールする力」のうちの「落ち着き」が、他の観点に比べると低い傾向にありました。また、【好奇心】のうち、「色々なことへの興味や関心」は「自分の疑問に対する答えを求める力」と比べて高いという結果でありました。

以上が、小学生すくすくウォッチの結果概要でございます。

最後となりますが、今回の各種調査結果を踏まえまして、学校全体で取り組む組織的な検証改善、および児童生徒一人ひとりの学習状況に応じた指導を充実させてまいります。

現在、2年目となります泉大津市の学力向上プランについては、子どもたち一人ひとりが自ら学び、考え、成長していく力を育むこと、すなわち自立した学習者の育成を目的としています。

今後も、教職員の主体性を尊重しながら、授業改善を通じて、子どもたち一人ひとりの可能性を最大限に引き出す教育を推進してまいります。

◆教育委員（奥健一郎）まず、この膨大な資料を整理してまとめる作業は大変だったと思います。非常に分かりやすく整理されていてすごく勉強になりました。ありがとうございます。私に関心を持ったのは76ページの「未来に向かう力」と好奇心についてというところです。

「人と関わる力」が他の力に比べて高いということで、つまり、コミュニケーション能力があるかどうかは別にして、そういうような力があるという事例があるということと、それと、「ぶれない心」「落ち着き」が他の点に比べると低いということで、これも素直に書いてるんですね。「ぶれない」や「落ち着かない」は大人でもあります。ただそもそもそうだと認めている、その一方で、興味、関心がすごく高い、しかし、その疑問に対する答えを求める力、自分で求めていくことはなかなか難しいということ素直に認めてるわけですね。これを見たときに、好奇心が非常に強くて、人と関わることも力もあって、しかし求める力が弱いということであれば、全体で見た場合、各論はすごく大事なのですが、各論全体を貫く総論になる1本の柱は何かというところを、きちんと流れを起こしていけば、後の各論は、おそらく流れが自然に加速されていくと思います。つまり、根と幹がしっかりしていれば、残りの枝葉にもどんどんそのまま加速していくという図式が一番効率的かという感じがしました。

その観点からすると、このアンケートの結果から見ても、全体を通して解決のためには、何のためにこれをやるのかという意義や目的が、きちんと自分の中に入れば、泉大津市の子どもたちはスイッチが入るということだと思います。実際に学校に見学に行っても、すごく皆さん明るく勉強していますし、決して沈んでいるわけではありません。このアンケートのとおり、本当に興味や関心は高く、人と関わる力もあるだろうし、ただやはり粘り強く求める力が弱い、ぶれない心や落ち着きがないということ自認しているので、何のためにやるのかということさえはっきりすれば、子どもたちは、必然的にやる気を持ってやっていけると感じました。それができれば、残りの各論も必然的に解決するのではという気がします。

まずその1点をどうするかということに注力する。何のためにこの勉強してるなど、例えば国語であれば、先ほどの解決法の中で出てきましたが、自分が何かを主張したいときに、必ず根拠を述べないといけないわけです。なぜ私はそういう考え方をするかということ相手を相手に伝えないと相手も理解してくれません。そ

の根拠をきちんと順序立てて、筋道を立てて話をしないと、相手も理解してくれません。あなたを理解してもらうために勉強をするわけです。理科の場合は、先ほど乾電池の配列の話がありましたが、エネルギーの流れというのは、人との交わり方のエネルギーなので、直接の方が、バラバラに繋ぐよりもいいということもあるでしょうし、とにかく色々なやり方で何のためにこれをするのかということがきちんと入れば、このアンケートの結果を見ても、一度スイッチが入れば、加速していくのではという気持ちがすごかったです。

なので、まず総論になる1点を何のためにするのかという意図を話して、子どもたちが理解できれば、自然にできるようになると感じました。

- ◆教育委員（西尾剛）小学生すくすくウォッチについて、調査目的が「子どもたち一人ひとりが自らの強みを知り～」となっておりますが、この調査結果は一人ひとりに教えられるのですか。あなたはこの調査結果に書いているとおり、この部分が、弱い、表現力や読解力がないということが還元されますか。

還元するのであればいいのですが、それに基づいて、解説や振り返りや復習はしてるのでしょうか。それをするのとしなないとでは全然違うと思います。教師がテストでどういうことを聞きたいか、問題文のどういうところに神経を行き届かせて読む必要があるか等、そういったことを復習で教師が教えてあげれば、次からケアレスミスへが減り、正答率が上がると思います。

テストである以上そういった対策をしておかないと個人のポテンシャルや能力を示すことができないので、塾ではそういった対策はすると思うのですが、学校でもそういった対策、適切に対応できるように復習することが一番いいと思います。そういうことに時間を取ることが必要ではないかと思います。

学調の場合そういった子どもたちへの還元はあるのでしょうか。

- ◎指導課長補佐（山本圭亮）個人票は返却されます。

- ◆教育委員（西尾剛）そこには弱みや強みの分析表はあるのですか。

- ◎指導課長補佐（山本圭亮）すくすくウォッチに関しましては、ウォッチシートという個人票が返却されます。このシートには、児童の強みや課題となる点が記載されています。これらの内容を踏まえ、教師による指導も受けながら、子どもたちは授業やドリル等で課題に意識的に取り組み、学びを深められるようにしています。

また、学校には、学校票というものが返却され教職員間で共有されることで、授業の改善や指導に活用されています。

- ◆教育委員（西尾剛）それは先生としての教え方の改善ですよね。そうではなくて、子どもたち一人ひとりが、自分の勘違いや方向間違いを気づかせてあげることが、次に活かすためには大事だと思います。

もう1つ、学力・学習状況調査は国が実施していて、すくすくウォッチは大阪府が実施しているものですが、分析の仕方を見るとどちらも一緒ですが、同じ業者がやっているのでしょうか。

- ◎指導課長（藤谷考志）すくすくウォッチは内田洋行が関係してまして、学調についても大手が入っています。

- ◆教育委員（西尾剛）ではこの分析は自分たちで作成したのですか。

- ◎指導課長（藤谷考志）分析は各担当が作成しています。

- ◆教育委員（西尾剛）府からデータが来るのではないのですか。

- ◎指導課長（藤谷考志）ある程度のデータの基になるものは来ますが、基本的には担当が分析をしっかりとしています。

- ◆教育委員（池島明子）個人のものは、あなたはここが強みでここが弱いということが、印刷物か何かで個人に渡されるということですか。

◎指導課長補佐（山本圭亮）はい、そうです。

◆教育委員（池島明子）それを読み取る力があるかどうか、また、問題になるのではと思いました。書いている内容がわからず、ご家庭に持ち帰っても、ご家庭によって、わからないから先生に聞いてとなつて、ここまで手間をかけて相関を見ていただいて、アンケート結果をまとめていただいている結果を、すごいと思うのですがそれが各家庭各子どもたちに、学校が色々考えてやってくれていることが、届かないとすごくもったいないと思いました。やはり、これを見ると、いかに国語が大事で、家に本があることが大事で、それが、算数の結果にも出てきていることが、見るとわかりますが、たくさんあると、面倒くさいからいいやとなつてしまいそうなので、学校の通知表だったら親もしっかり見るかもしれませんが、一斉テストの結果となると、少しのことだろうと、軽く見がちではないかと思います。返却の仕方を、私たちが説明を受けたような説明会のようなものを学校単位で開いて、こういうふうに見て欲しいと、聞いてもらうことによって、家庭教育でも変わってくるのではないかと思います。労力をかけてまとめていることをもっと各家庭に届けたいと思いました。

◆教育委員（奥健一郎）人材育成の戦略という問題なのですが、良くないところを洗い出して、問題解決をすることも大事ですが、一方で、必ず長所があるので、それを見つけてそこを伸ばしていくことに、必ず悪いところの関連性も出てきます。全ての問題は繋がって関連しているのです。

いいところを見つけて褒めて伸ばす中で、必ず「だったらこれもできるよね」ということになってくると、やる気が湧いてきます。悪いところだけを羅列してそこを解決しましょうとなると、モチベーションが上がりません。必ずいいところがあるはずで、そこを見つけて、そこから攻めて、良くないところに波及させていくということは、実はこれは子どもたちだけではなくて、会社の社長さんもそうで、社長さんに対して悪いところを羅列してこれを改善しないといけなさと伝えてもやる気が湧かない訳です。社長さんが頑張っているところ、良いところを褒めて、良くないところも関連付けてやっていくと、はるかに効果的面は多々あります。

なので今、説明会のお話が出ていましたが、子どもたちはこういう良いところもあるので、ここを伸ばしていきながらこういうところを解決していきましようとなるといいのではという気がします。

◎指導課長補佐（表一成）子どもたちへのフィードバックにつきましては、教育長とも相談の上で、2年前から、子どもたちに個票を返却する際は、校長先生が代表して、子どもたちにはよかったところ、課題であるところをまとめて、集会等でお話をした上で、クラスの中で返却をしていただくということになっておりまして、フィードバックを一人ひとりにというところまでは至ってはおりませんが、クラス単位や、学年単位の中では、そういったフィードバックつきで返却がなされております。

保護者につきましてはやはり、池島委員がおっしゃるように、課題であると捉えております。現在、ホームページへの掲載にとどまっておりますが、説明会等のご意見を参考に、検討させていただければと思います。

また、奥委員がおっしゃった得意を伸ばすという点につきましては、次期学習指導要領でのキーワードになっておりまして、教科のバランス等も鑑みながら、また各学校で教育課程のバランスを考えながら、子どもたち一人ひとりの可能性を広げていく、そして得意に注目して伸ばしていくことも、今後、大事になってきますので、今後の、教育の流れの中では、今おっしゃっていただいたことを、やはり教員がしっかり意識して取り組んでいくことが大事だと思っております。

◆教育長（竹内悟）各学校もこれに似た形で分析しています。また、学力担当者が自校の良いところ、悪いところを通信等で出している学校もあります。その出している通信がそのまま、紙媒体で塾に行ったりしていることもあります。塾が、その塾生に対して、フィードバックしているところもあると聞きます。

中学校も同じように、学力担当が動いて返却しており、校長先生が発信するということで伝えています。

委員の皆さんに知っておいてもらいたいのが、私が6年前に教育長になって、コロナ禍の令和3年・4年ぐらいまで、毎年学力担当の指導主事が変わり、経年比較できるような資料が出てきませんでした。そこで、彼らにとにかく、経年比較できるようにしていかないと、その年の子どもが悪かったの一言で終わってしまうので、泉大津の強み・弱みの全体像を把握して、各学校の学力担当に返せるようにして欲しいということを大分お願いして、今の状況になってきています。

◆教育委員（奥健一郎）もうひとつ、先ほどの76ページの、【好奇心】の「色々なことへの興味や関心」というところについて、やる気を持って取り組むとはどういうことかということ、やる気を持って取り組むときはぶれていないわけです。当たり前ですが落ち着いているわけです。全部関連しています。「ぶれない心」や「落ち着き」は他と独立しているわけではなく、何かに関心を持って取り組むときは、ぶれていないんです。全部同じことです。

◆教育委員（西尾剛）関連してですが、チャレンジテストについて、結果が大阪府のホームページに自治体ごとの順位が1位から最下位まで、毎年公表されています。それを見ると、泉州地区は下位で、北摂地区は上位で差が歴然としています。毎年変わりません。環境や地域性、家庭が教育熱心かどうかの影響していると思うのですが、内申点に影響するので、先ほど言ったことと同じで、チャレンジテストは2・3回あると思うのですが、その度に、振り返りや、どこを自分が間違っていて、どういうふうに勉強し、どういう問題に気をつけるべきかを、もう少し、個々人が気づけるように、池島先生がおっしゃったような説明会をするとか、もう少し細かいケアをしてあげないと、泉州地区の子が上に上がっていくことが難しいのではないかと思いますので、もっと手厚い個別的なケアをしてあげるべきだと思います。なぜ泉州地区が下位で、北摂地区が上位かというのはやはり、家庭が教育熱心かどうかということに尽きる気がします。

残念ながら、全体的に見て、北摂に住んでいる方よりも、教育熱心な家庭が少ないのであれば、それをいつまでも放置すれば、そのままなので、やはり学校で、もう少し本人が勉強するように、或いは、少ない勉強時間でももう少しテストの点が上がるように工夫しないといつまでも同じになるのではないかと思います。

◆教育委員（澤田久子）関連して、保護者に返していくことについて、例えば1学期に割と個人懇談が多くて、個人懇談では学校での状況をお話しすることが多いと思うのですが、その中で、学校という単位ではなく、国や府で見たときにこういう課題があります、こういう点が良いですということを懇談の中で返せば、一人ひとりに返す手立てになるのではないかと思います。学校という狭い範囲ではなく、もう少し大きく見た段階での結果を、返すことも1つ方法としてあるのではないかと思います。

◎指導課長（藤谷考志）1学期の個人懇談に間に合うようにということで、各学校日程が先に決まっているのでむずかしいところもあるのですが、結果の公表が少し早くなり、ウォッチシートの返却も早くなってきています。返却の時期についても今後、さらに検討が必要だと考えています。

◆教育委員（澤田久子）泉大津市は個人懇談で返しているのですか。

◎指導課長（藤谷考志）学校によります。昨年までは個人懇談に中々間に合わない日程での返却でしたが、今年は個人懇談に間に合うようにということで考慮されたのですが、学校によっては6月中に個人懇談をしているところもあるので、今後考えていかないといけないことではあります。

◆教育委員（奥健一郎）いずれにしてもこれだけのことをまとめることは本当に大変だったと思いますし、参考になりました。ありがとうございます。話が合ったように、これだけ教育委員会がしているということをもっと外に出してもいいのではないかと思います。

◆教育長（竹内悟）保護者に返すということについても、返し方、伝え方は永遠の課題かと思います。また、官民連携と言われているので、小学校高学年と中学校で大体6割が塾に通っている現状もあるので、泉大津の塾を集めて説明会をしてもいいのか等、学校長とブレストをして、課題を挙げて対策を考えていかないといいけません。私はよく校長権限でという校長の責任を重んじて言いますが、やはり指導課がイニシアチブを取らないと、学力については、中々難しいと思っています。

※報告第21号終結

△日程第2 報告第22号 泉大津市教育委員会の後援名義使用について

◎教育政策課長（大塚和弘）趣旨は、泉大津市教育委員会の後援等に関する要綱に基づき、後援を承認いたしましたので報告するものでございます。

対象期間は令和7年8月1日から8月31日まででございます。

内容につきましては、別紙1、4ページをご覧ください。

申請件数は8件で、全件を承認しております。

番号2、4、5、8には、新規事業でございます。事業要件としてそれぞれ、演劇を通じた泉州地域の文化振興、地域主体による市民への学びの提供と、交流、繋がりづくり、生活上のリスクの学びによる危機管理意識の醸成、教育機関の研究事業を通じた学びの提供と、教育行政施策及び教育現場の発展を図るなどの目的や事業内容が、教育、学術、文化の振興に寄与するものであると認められ、近隣で開催されることから広く市民が参加できるもの、かつ、主催者に事業遂行能力があると認められると判断し、承認したものでございます。

◆教育委員（澤田久子）8番の、観光大学がやっておられる、楽しむ力と教育変化について、内容はどのようなものですか。

◎教育政策課長（大塚和弘）大阪公立大学の高等教育研究開発センターの局長である西垣先生が、「楽しむ力」を研究されており、その先生の招待講演や、観光大学の教員の実践報告、参加者同士のグループワークを通じた、研究成果の議論という形の内容になってます。

◆教育委員（澤田久子）場所はどこでされるのですか。

◎教育政策課長（大塚和弘）大阪観光大学です。

◆教育委員（奥健一郎）大阪観光大学の教育改革に関わる話ということですか。

◎教育政策課長（大塚和弘）研究事業を踏まえたシンポジウムを行います。

※報告22号終結

午前 11 時 20 分終了

議事録署名委員

教 育 長

教 育 委 員